



一般社団法人 日本庭園協会

東京都新宿区西早稲田 1-6-3 フェリオ西早稲田 301

〒169-0051 TEL:03-3204-0595 (FAX 兼用)

E-mail: gsj20@m7.dion.ne.jp URL: http://nitteikyuu.org/

編集者: 広報委員長・柴田正文

委員・小沼康子、加藤精一、内田均、鈴木貴博

題字: 故・上原敬二

発行日: 2018年(平成30年)3月16日



昭和59年 武蔵丘陵森林公園での伝統庭園技塾で、茶庭の指導をする岩城巨太郎理事長(当時)

創立100周年を迎えて

三橋 一夫

本年は大正7年(1918)に本多静六氏を初代会長として当協会が創立されて以来、100周年に当たり、この記念すべき年を皆さんと共に祝えることは大きな喜びであります。関東大震災、太平洋戦争など大きな災害を経て現在ここに至るまでの当協会の歩みは決して平坦なものではありませんでしたが、その時、その折の会長、役員の方々の熱意と会員の皆さんの協力を得ながら様々な変遷を経て今日の庭園協会があるのです。創立から昭和50年代までの50年間は上原敬二、田村剛、龍居松之助先生、次いで日本造園士会と合併して新たにスタートした昭和52年以降は飯田十基、岩城巨太郎、斎藤勝雄、小形研三、北村信正、吉川需、中瀬操、中村一、吉村金男、龍居竹之介各先生方、また鑑賞会では小泉賀一郎、樋沼恕、西村章子各氏らの指導により会の活動は多岐に渡り活発でありました。入会して50年になんなんとする間に、務めさせて頂いた役職を通じ、多くのこれら先生方の警咳(けいがい)に接して様々な大きな教えを受けたことは、今では得がたい貴重な体験でありました。100年の歴史の中のほんの一端ではありますが、昭和56年(1981)から17年間に渡って務めた「伝統庭園技塾」の企画、運営は各県支部の活動も充実してきたので、平成8年(1996)から新たに任命された海外活動を担当することになりました。オレゴン州ポートランド市に拠点を置く「国際日本庭園協会」のキャップ・佐伯会長と龍居会長(当時)の話し合いの中から「日本庭園の技と心を正しく世界に伝える」をテーマとして活動を共催し、2年毎に日本と外国で交互にシンポジウムを開催してきたのは皆様周知の通りであり、多くの方に講演やワークショップに参加、協力をして頂きました。これらのシンポジウムを通して海外の日本庭園に働く技術者との交流が盛んになり、現在我々の活動は北米日本庭園協会(NAJGA)に移行して更に活発に続けられています。海外での地道な活動の積み重ねの結果、技術指導の講師派遣提携が具体化しつつあります。後に続く人達への道筋を作ることが私の仕事と認識していますが、「温故知新」、当時とは大きく変わった情勢の中で、改めて先人達が残していかれた100年間の軌跡を振り返って、何らかの示唆をうけ、会員相互に知恵を出し、力を合わせて庭園協会の新しい出発点としたいと願うものです。

(理事 国際活動委員長)

東京都支部・本部共催 連続交歓講座
《人と自然を結ぶ文化の大地》
第1回講演会

平成30年2月11日

木の植え方ではなく木を植える意味

豊藏 均

今年、私たちの日本庭園協会は創立100周年を迎えます。100年前に描いた先人たちの夢は、大正デモクラシーの最盛期に高い芸術性と科学的要素を兼ね備えた庭を一部の趣味人から解放させ、秘めた庭の可能性を一般社会へと広く普及させること、つまり庭のルネッサンスを目指していたのではないのでしょうか。それを証明するように庭と密接な関係にある建築界をはじめ、あらゆる分野とも互り合える価値観の再考察と意識の変革に努めてきたようです。

100年経った今、他の分野は著しい進化と発展を遂げ、私たちの庭とは比べようがありません。

それに反し、庭を取り巻く社会環境はますます狭まっています。しかし庭が時代遅れの産物とも思えませんが、無機質な生活空間を潤すために不可欠なのは昔とは比較にならないほど求められています。むしろ時

代遅れなのは庭を作る側の意識の低さと貧しい価値観かも知れません。これを改めるため東京都支部の有志は、すべての科学と芸術を根底にしながらか総合的な眼で庭を捉え直す大きな転換点が今だと気づきました。

100年前に見た先人の夢は私たちの夢でもあり原点です。これを基に「日本庭園」の四文字と「伝統」の二文字に潜む表面的で形式のみに偏った「形骸化」を食い止め、未来へ負の遺産を残してはなりません。

さらに最も大切なことは、古代から現代まで貫く日本人の普遍的な精神性を捉え直し、原点回帰することです。その文化を大地に譬え、しっかりと根を張った庭を模索しなければなりません。

そのために私たち東京都支部は、



高野義武理事長（左）と司会・進行の豊藏均氏



8月の講習会で作った編笠門の脇にできた瓦土堀

場所場所皆に、言葉（ジョークを交えて）声をかけられ、場は和みました。8月の講習会では、（編笠門、桂垣、三和土、延段）2回目の10月には（水琴窟、瓦土堀、植栽）どれも普段はなかなかすることのないもの、中には一生しないものもあり貴重な経験でした。8月の戦場のような講習会の余韻冷めやらぬまま、10月の2回目の講習会に突入。今回も驚愕で、2メートル位の深さを掘り、竹の暗渠排水、巨大な鞍馬石の水鉢、役石をコロと三又で、水琴窟を生け、急ぎよ決まった瓦土堀、更にもう1基水琴窟、植木も数人で担ぎ入れ、延段、雨落ちの菊炭と今回も凄かったです、前回よりも少ない2日間で30人にも拘らず、素晴らしい魂のこもった物が出来ました。今回、安諸親方は、沢山の言葉を残して下さいました。備忘録より、「10年の間にするか、しないかの仕事も庭師は覚えておかなくてはならない。だから



軒先に組んだ縁先手水鉢

らジャンルを問わず色々な事を勉強しなくてはならない」色々な物を見て経験して勉強して引き出しを沢山持ち、咄嗟に使えることが出来る。それが親方の言われる『底力』なのだと思ふ。現在、講習会場になった旧奥野邸は市の管轄だが、殆ど使われていない。モノづくりにおいて魂のこもった物はきつと残っていくし人の心も動かす。備忘録より、「庭を造ることで家族を地域を社会を幸せにできるのは庭師の仕事である」安諸親方より、ここを「安松軒」（安来と松江より）と命名。編笠門の棟木には「楽只遊庭」次世代にこの技術を精神を繋げてほしいという親方の強い思いがヒシヒシと伝わった。この恩返しは後の者がしっかりと

創立100周年を大きな節目とし連続講座を設けることにしました。テーマを《人と自然を結ぶ文化の大地》と定め、日本文化や庭へ思い入れを抱く識者を講師として迎え、人と庭との交歓を目的にした交歓講座の開催です。その記念すべき第一回目が、去る2月11日、本協会と深い縁のある日比谷公園内にある日比谷コンベンションホールにて開催しました。

講師は、旧建設省（現国土交通省）時代から森づくりを道路事業に取り入れながら大きな実績を残されてきたNPO法人国際ふるさと森づくり協会の高野義武理事長です。お話しは、加速する地球温暖化の現況から始まり、関東大震災で2万人の人命を救った清澄庭園、そして先の東日

平成29年度・30年度 支部活動報告

島根県支部・四国支部

島根県支部
安諸定男美技講習会Ⅱ

平成29年10月28日〜29日

『楽只遊庭』 岡 和生

不安な思いが顔に出ているのでしよう。8月の講習会前日に「岡君そんなシケた顔すんなよ」と

勉強していい庭、いい物を作っていくことだと思ふ。最後に、東京より山口庭園の皆さん、塩野さんと矢鳥さん、磯さんに木目田さんそして体調も悪い中、2度にわたって来て下さった安諸親方には感謝の念に堪えません。また奥野夫妻、後藤棟梁、大変お世話になりました。

（評議員 島根県支部長）

四国支部
第2回 実践！石積み講座
1外空間に石積み風景を取り入れる！

平成30年1月13日〜14日

愛媛で受けた石積み講習会

関 利晃

この度、以前から庭の雑誌やネット上で拝見していた越智将人氏による石積み講習会の開催を庭園協会からのハガキで知り早速申し込みました。講習会の当日は朝から、これから石積みすることへのワクワク感と現場での実践経験のない私でも大丈夫なのかというドキドキ感で緊張していました。いざ講習会場の『いよせき』に着き、最初は座学からでした。講師には越智将人氏、奥山聖治氏、西窪周二郎氏を迎えスタートしました。座学

本大震災における森林の防災効果までを数値と写真で説明されました。森といっても林学で説くものではなく生態学で捉え、その地域における鎮守の森に匹敵する林相を短期間で育成させるといのが今回の講演の主旨でした。

「木を植えるから庭なのか？庭だから木を植えるのか？」。プロの作庭者でも漠然としか考えていなかった木を植える真意を自問自答する大きなきっかけをこの日の講演会はもたらしたようです。次回の講座は、建築家の金田正夫氏を講師に「地球環境に配慮した建築」と題して7月8日に清澄庭園内の大正記念館を会場に行う予定です。

（評議員 東京都支部）

安諸親方に言われました。これではマズいな、何としてもやらないと、覚悟を決めました。と言っても、解らないことばかり。しかし、集まった庭師さんの活気はもの凄く、目をキラキラさせ、真剣にいまやるべきことを只ひたすらに黙々と、私は何も言わずとも並行してどんどん作業が進んで行きました。安諸親方は、

は図や写真等を交えて分かりやすく説明して頂きました。石の選び方や根石から天端石までに基本となる手順や石の合端さらには石積みの際間に入る詰め石など細かい所まで説明がありました。その中で実際積む時に良い石ばかりではないという言葉が印象的であり実際にそういう時にどうするかという経験から来る生のお話が聞けて非常に勉強になりました。その後自分の石積みイメージを手書きで描きました。この時すでに石積みをしたというワクワク感でいっぱいでした。そんな折、あとは実際に実践を通して教えましょうという越智氏の言葉で実践に入りました。今回の講習会では野面積みを選びました。石は庵治石、大宝石（地元産）、木曽石がありその中から庵治石を選びました。現地ならではの石を使えるのもとても良かったです。施工面積は中1.2メートル高さ0.6メートルです。3〜4段の石積みで仕上りという想定です。まずは根石からです。角石は座学で学んだことを思い出しながら据えています。奥山氏に石頭の振り方など指導して頂きました。どの辺りが悪いのかアドバイス頂き、さらに見本をみせて頂き勉強になりました。特に難しかったのが加工する石をちや



木曽石を使った野面積み

んと安定させたり加工しやすい態勢にすることでした。1日目は2段目がもう少しという所で終わりました。その夜は懇親会もあり越智氏から石積みの練習方法や版築、植栽等色々のお話が聞けてすごく勉強になりました。楽しい食事会でした。いよいよ2日目です。天端まで積もうという意気込みでやりました。ただ中々進みません。赤ペンで線をしてハツリのみで加工しますが出来たと思いつく積んでは外し積んで外しの繰り返しです。さらには天端を想定して下の段を積むとなると石選びも難しくなりました。そんな中、何とか天端まで積み上がりました。積み上がった時

は何とも言えない達成感がありました。その後反省会では四つ目地や縦使いの石、加工の未熟さを指摘されました。その時は石をはめることを意識しすぎて気づきませんでした。実践することで難しいポイントや大変な点を体験でき、批評されることで反省もでき、皆さんの作品を見て参考にすることもでき、とても得る事の多い講習会でした。今回お世話になった(株)いよせきの社長白木氏また社員の方々、講師の越智氏、奥山氏、西窪氏、補佐して下さいました。方々ありがとうございました。

(正会員 神奈川県支部)

場数が欲しい 木守 康二

私は石積みの経験が少ない。しかも、今までなんとなくという感じで積んできた。とにかく場数が欲しい、基本を学びたいという思いで今回講座に参加させて頂いた。

会場へ向かう途中、しまなみ海道から見える風景は圧巻だった。目の前に広がる大海原の上をトラックで走る際には緊張感に包まれた。そして島に入ると緑に囲まれほっとする。再び海が開け、島に入り……。これらが繰り返されるうちに気分も高揚し、これから石積みを学べる事へ



コッツウォルズの石を使っての小端積み後は伊予青石の石積み

の期待感と気合十分で四国本土へ乗り込んだ。

会場には数人の参加者がすでに着いていて、講座開始までまだ時間があつたのでみんなで昼食を食べに行った。こういった講座のもう一つの醍醐味は各地方からの庭師達との出会いにもあると思う。石積み講座自体は以前に一度愛知県支部で行われたものに参加させて頂いた。私の解釈としては、前回の積み方は、石同士の肩や合端を合わせて左から右へ下から上へ順番に積み上げていくというものだった。今回は積み石の隙間に入れる詰め石(間石)の使い

方を学んだ。必ずしも全ての肩を合わせる必要はなく、積む順番も重量がかかる石を積んでからその隙間に詰め石を入れるというものだった。1日目は自分なりに順調に積めた。しかし2日目は苦戦した。最終的には天端までなんとか積めたが、私が一番最後だった。次の石が積みやすくなる様な石選びや加工が出来ていなかった事がスピードが遅い要因だった。また、それぞれの石がしっかりと固定されぬまま積まれているとの指摘も頂いた。これらの課題が分かっただけで大きな収穫だったし、次に積むのが楽しみになった。

講座を終えて、石積みは場数を踏まないとならないという事が改めて分かった。また、講師の方から「最終的には自分との戦い」という言葉が特に胸に刺さった。ただ積むだけでなく誰でも出来るが、精度を上げていくにはその言葉の通りだと痛感した。これは石積みに限らず多くの事に共通するのではないか。今回の講座を無駄にしない様、これからも精進して参ります。

(正会員 山口県支部)

訂正とお詫び

庭園協会ニュース91号1ページ巻頭言筆者 龍居竹之介名誉会長の名が違っていました。訂正してお詫び申し上げます。